

3 保育・教育と「ESD」「SDGs」

大阪総合保育大学 教授 瀧川 光治

1 「持続可能な社会の創り手となっていく」ことをめざす保育・教育

保育・教育の営みは、一人ひとりの子どもたちのウェルビーイングが保障されることを基盤として、私たちの社会の一員でもある子どもたちが持続可能な社会の創り手となっていくことを意識して取り組む必要があります。(本カリキュラムの「はじめに」参照)

そのような持続可能な社会の創り手となっていくことを意識した教育を、「ESD」といい、そのめざしていく目標が「SDGs」(持続可能な開発目標)であり、17の目標が定められています。この目標を大人が意識して取り組むだけでなく、子どもたち自身が主体的に考え、行動し、いろいろな活動の場面で「自分のこととして捉える」ことができるように育てていくことが大切です。そのために、保育者の援助・配慮としては、「子どもたち自身が自分たちで何ができるか」を意識できるような問いを持ったり、活動していけるようにしていくことが求められます。



きっかけは、地域のゴミ拾いなどのイベント的に始まったものであったとしても、それを体験して終わりではなく、継続的な取り組みとして、その後の子どもたちの生き方や生活につながり、社会の一員として当事者意識が生まれてくるのが大切です。すなわち、「SDGs」に関わる何かに取り組み、「体験・経験すること」「知ること」で終わるのではなく、さらにその取り組みが継続していく中で、子ども自身が世の中や世界などについて関心が広がったり、深まったりして、徐々に社会の一員として当事者意識をもって取り組みを継続していくことが大切です。

また、「ESD」(持続可能な社会の創り手となっていくことを意識した教育)は、「SDGs」の17の目標を意識しながら、私たち大人も社会の一員として当事者意識をもって取り組むことが求められます。

2 箕面市の「子どもとSDGs」

箕面市の「子どもとSDGs」の取り組みを見ると、何か特別なことをしているというわけではありません。日常の保育の中に、すでにSDGsの取り組みの要素が含まれているのです。まずは、日々の保育をSDGsの視点から17の目標で意味づけて捉えなおしていただくことが大切です。

「子どもとSDGs」に出ている17の目標を表にしてみると次のようになります。

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
1: 貧困						
2: 飢餓	●	●	●		●	●
3: 健康・福祉	●	●			●	
4: 質の高い教育	●	●	●	●	●	●
5: ジェンダー平等			●	●		●
6: 安全な水						
7: エネルギー					●	
8: 働きがい			●			
9: 技術革新						●
10: 不平等				●		●
11: まちづくり				●		●
12: つくる責任						●
13: 気候変動					●	●
14: 海の豊かさ						●
15: 陸の豊かさ		●		●	●	●
16: 平和と公正						●
17: パートナースhip				●	●	●

0, 1, 2歳児では「2: 飢餓」「3: 健康・福祉」といった項目につながる「食べること」「健康に過ごすこと」が、生きる基本として意味づけられています。そして、しっかり遊べる環境を整え、「やりたい気持ちがたくさん生まれ、自分でしてみようとする」ことや「自分のしたい遊びや活動、役割を選択する」ことができることが、「4: 質の高い教育」につながっていきます。

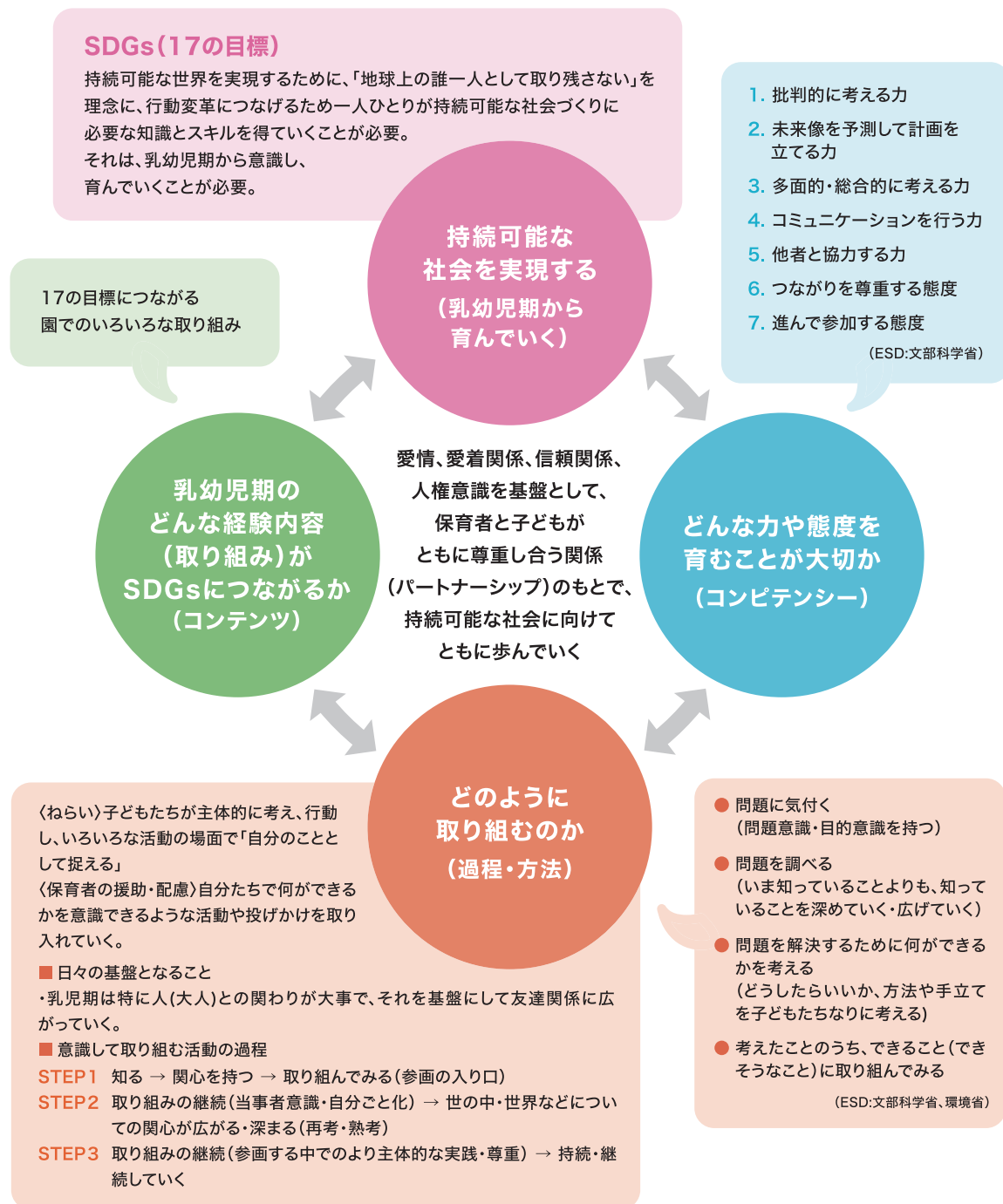
最初は大人からの働きかけが大きいかもしれませんが、「食べることを楽しむ姿」「のびのびと体を動かすことを楽しむ姿」は、食べることや体を動かすことを「自分のこととして捉えて行動する姿」が芽生えているとも言えます。さらに、「やりたい気持ちがあふれている姿」「自分のしたい遊びや活動を楽しんでいる姿」も「自分のこととして捉えて行動する姿」が芽生えているとも言えます。

このような経験や育ちが土台となって、年齢が上がると、さらに人や生き物（自然）との関わりの視点や社会とのつながりの視点からも意味づけが多くなっています。自然に触れ、生き物や植物を育てたりする中で、「15: 陸の豊かさ」だけでなく「13: 気候変動」「14: 海の豊かさ」への関心が育まれます。そこから疑問が生まれ、調べたり、解決したりしていく力が育まれます。継続的に取り組んでいく中で、自分たちでどうしたらよいかを考え、「自分のこととして捉えて行動していく」ことができるように、保育者として何ができるかを考えてみます。また、「5: ジェンダー平等」「16: 平和と公正」「17: パートナースhip」へと、人との関わりや社会とのつながりに関心が広がっていくのも幼児期の特徴です。

とくに、「17: パートナースhipで目標を達成しよう」は、互いに対等な人間関係の中で、ともに協働する意識を持つことが大切です。クラス内の子ども同士の間人間関係として互いに対等で尊重しあう関係が生まれるクラスづくりはもちろんのこと、大人と子どもの関係も“パートナースhip”を意識し、さらにさまざまな人たちとの関わりの中でも意識することが大切です。そのためにも、「子どもとのパートナースhipを意識するために、私たち大人は何ができるか」を問い続けることが大切です。そして、このことは箕面市の「子どもの人権を尊重する保育・教育」の考えや理念にもつながっています。

3 「ESD」は、何に取り組むかだけでなく、何を育てるかの視点が重要

ここで、文部科学省や環境省などのサイトから関連する情報を踏まえて理解を深めましょう。保育・教育の営みは「目標(めざす方向性)」「育てたいこと」「内容」「方法」を踏まえて、具体的な活動に取り組むことで成り立っています。それらの関係を図に表すと下記ようになります。



- ① 愛情、愛着関係、信頼関係、人権意識を基盤として、保育者と子どもがともに尊重し合う関係(パートナーシップ)のもとで、持続可能な社会に向けてともに歩んでいくことが大切です。
- ② 「内容」「方法」「育てたいこと」を絡ませて考えるー「何をするか」「どんな取り組みをするか」といったコンテンツ(内容)や「どのように取り組むか」(方法)に加えて、それらを通して「どんな力や態度を育むのか」といった「育てたいこと」(コンピテンシー)も含めた観点から考えることが必要です。
- ③ 大人も子どもも「自分のこととして捉える」ことができるように、「継続的な取り組み」と「参画していく過程」が大切です。その中で「気付く」「考える」「他者と協力する」力を育んでいきます。